

話を聴く語り手 — シュテファン・ツヴァイクの粹物語とフロイトの精神分析 —

籠 碧

1. はじめに——ツヴァイクの要らない「粹」とフロイトの精神分析

作家シュテファン・ツヴァイク（1881~1942）は自伝的エッセイ『昨日の世界 あるヨーロッパ人の回想録（Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers）』（1942）で、自分の執筆業について振り返っている。「わずか数年で私は、個人的には一人の作家が望みうる限り最も素晴らしい種類の成功と思われるものを手にしていた。ひとつの共同体、信頼できる人々のグループだ。みんなどんな新刊でも待ち望んで、買い求めてくれた」（WG 364）。ツヴァイクによれば、「ドイツでは私が出版するどんな本も、まだ新聞紙面に広告ひとつ出ていないというのに、発売初日に2万部は売れた」（ebd.）。伝記物から小説、戯曲から評論に至るまで幅広い文筆活動を行ったツヴァイクは、事実、生前は世界的なベストセラー作家だった。その死後も、当時の勢いには遠く及ばないながらも、一定の読者を獲得し続けている。

にもかかわらず、もしくはまさにそのために、文学研究者はこの作家の作品を長い間ともに扱ってこなかった。¹ しかし生誕 100 周年を迎える 1981 年に関連書籍が多数発行されると、徐々に作品の再検討が行われ始めた。² 特に 2000 年以降ツヴァイクに関する学術研究が積み上

* 本稿は、2018 年日本独文学会秋季研究発表会にて行った口頭発表「シュテファン・ツヴァイクの小説技法と精神分析」に加筆修正を施したものである。

* 本稿では主に次の6つのテキストを扱う。それぞれ略号とページ数で引用箇所を示す。Zweig, Stefan: *Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers. Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Frankfurt a. M. 1982 [WG]; Zweig, Stefan: *Die Heilung durch den Geist. Mesmer; Mary Baker-Eddy; Freud. Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Frankfurt a. M. 1982 [HG]; Zweig, Stefan: *Der Amokläufer*. In: Ders.: *Der Amokläufer. Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Frankfurt a. M. 1984, S. 70-134 [AL]; Zweig, Stefan: *Schachnovelle*. In: Ders.: *Buchmendel. Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Frankfurt a. M. 1990, S. 248-314 [SN]; Zweig, Stefan: *Vierundzwanzig Stunden aus dem Leben einer Frau*. In: Ders.: *Phantastische Nacht. Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Frankfurt a. M. 1982, S. 70-144 [VS]; Zweig, Stefan: *Ungeduld des Herzens. Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Frankfurt a. M. 1981 [UH]. また、ツヴァイクとフロイトの往復書簡は以下のものを使用し、カッコ内に日付とページ数を示す。Zweig, Stefan: *Über Sigmund Freud. Porträt – Briefwechsel – Gedankworte*. Frankfurt a. M. 1989 [BW]. なお引用文中の強調箇所は原文に従っている。

¹ Larcati, Arturo / Renoldner, Klemens / Wörgötter, Martina: Vorwort. In: Dies. (Hrsg.): *Stefan Zweig Handbuch*. Berlin / Boston 2018, S. XI-XIII, hier S. XI. 1960~70 年代にはむしろ、亡命作家としてのアイデンティティなどその政治的な姿勢を論じられることが一般的だった。Vgl. ebd.

² Vgl. ebd.

げられてきており、2018年5月にはDe Gruyter社からハンドブックが刊行されている。ツヴァイク・ルネサンスと言うべきこうした状況は、アカデミズムの内部でのみ起こっているわけではもちろんない。³ 例えば1960年代にみずず書房からツヴァイク全集が発行された日本でも、1990年代にその伝記物が改めて出版されている。そして注目すべきことに、2010年代に入ってもなお短編選が2冊、改めて刊行されているのである。

ウィーンの裕福なユダヤ系ドイツ人家庭に生まれ、コスモポリタンを自認し世界中を旅して回ったツヴァイクは、「翻訳本のいろいろな版を収納するため、巨大な戸棚を新しく購入する」(WG 367) 必要に迫られるほどに各国でヒットした一方で、ドイツではナチス・ドイツの焚書に遭う。1942年、終わる見込みのない戦況に絶望して亡命先のブラジルで命を絶っている。『昨日の世界』はこうした亡命生活の中で書かれたものである。

ツヴァイクはマリー・アントワネットやエラスムスなどの伝記物で最も広くその名を知られているが、フィクションの物語にもたくさんのファンがついていた。そもそも多作の人だが、その作風が確立したのは第一次世界大戦後のことで(WG 347f.)、特に1920年代に多くの物語を残している。ツヴァイクの物語を読んでいると、枠物語(Rahmenerzählung)の形式にたびたび出くわすことになる。1920年代以降に書かれた枠形式をとる主な作品として、短編・中編小説(Novelle)では『知らない女からの手紙(Brief einer Unbekannten)』(1922)、『アモク患者(Der Amokläufer)』(1922)、『異常な夜(Phantastische Nacht)』(1922)、『女の生涯の二十四時間(Vierundzwanzig Stunden aus dem Leben einer Frau)』(1925)、『目に見えないコレクション(Die unsichtbare Sammlung)』(1925)、『本のメンデル(Buchmendel)』(1929)、『チェスの話(Schachnovelle)』(1942)が挙げられる。完成した唯一の長編小説(Roman)『心の焦燥(Ungeduld des Herzens)』(1939)も、枠物語の形式をとっている。

さて、ここに挙げた主な枠物語のうち4つまでが、「定型」と呼びたくなるような、互いに似通った構図を持っている。それは、一人称である外枠の語り手(Rahmenerzähler)、「私」に対して、枠内の語り手(Binnenerzähler)が、自分自身の体験談を一人称で語るということだ。外枠の「私」はツヴァイクと同じく作家で、ウィーン出身であることがしばしば示唆され、旅の行き先までツヴァイクとよく一致している。⁴ それに対して枠内の語り手は、医者、勲章を与えられた退役軍人など、世間的に好ましく思われる立場の人だ。しかしそうした人々が滔滔と語るのは、期待されるはずの市民社会の規範から大きく逸脱したときの顛末である。つまり「そ

³ ツヴァイクからインスピレーションを得て製作されたというウェス・アンダーソン監督の映画『グランド・ブダペスト・ホテル』(2014)の世界的な成功は記憶に新しい。

⁴ 外枠の語り手とツヴァイク自身のこうした類似については vgl. Turner, David: The Function of the narrative Frame in the 'Novellen' of Stefan Zweig. In: *The Modern Language Review* Vol. 76, No. 1 (1981), pp. 116-128, here p. 127. 両者があまりに似ているために、両者を同一視することが、是非を検討されることなくしばしば行われている。本論もあえてこれに反論しない。

れまでは日常的で因習的な暮らしをしていた人が、突如、自分自身をも破壊しかねないような偏執狂的な情熱にさらわれる」⁵ のだ。ツヴァイクは、「情熱 (Leidenschaft)」というテーマにこだわっていた。⁶ 枠内の語り手はそのときの心の様子について、微に入り細に入り語る。枠物語が導入されることによって、「私」に対して見ず知らずの他人が告白するという文脈ができあがる。「私」や読者の立場から言えば、そこで行われていることは暴露だ。以上のことが当てはまる 4 作品とは『アモク患者』、『女の生涯の二十四時間』、『心の焦燥』、『チェスの話』⁷ である。⁸

こうした「定型」をとる枠物語で奇妙なのは、外枠を取り外しても話が成立するように見えることだ。つまり枠内物語だけが独立し、さらに三人称で書かれていたとしても、ほとんどあらずじに影響がない。外枠の語り手は、「作家」、「ウィーン出身」といったおなじみの属性の他は個性を与えられず、目の前の人間にとっても関心があるということ以外に何か注目すべき感慨をさしはさむわけではない。『チェスの話』を除いて、「私」の言動が物語を大きく動かすこともない。ほぼ人の話を聴いているだけの「私」は、いわば無色透明の観がある。おそらくこの印象は、ドイツ語圏文学史と照らし合わせてみたとき、「ツヴァイクの作品は研究する価値がない」という言説を強化しかねないものだ。というのも、ツヴァイクの小説執筆は 1920 年代以降の時期に集中している一方で、枠物語という形式はドイツ語圏では 19 世紀に流布したあと 20 世紀に入る頃にはすでに廃れていたという認識が、研究者の間で共有されているからだ。⁹ 枠物語の名手としてよく名前が挙がるのは、ハウフ、ゴットヘルフ、C・F・マイヤー、そしてシュトルムといった 19 世紀の巨匠たちである。そのように時代遅れの形式をあえて使うのなら、何らかの新しい意味付けが期待されるけれども、ツヴァイクの場合それが見当たらない。

実際、アルトゥル・シュニッツラーやロベルト・ムージルの作品を好意的に検討することでモダニズムの時代に枠物語がなお発揮し得た新奇性を示そうとするシュトラートマン (2000)

⁵ Müller, Hartmut: *Stefan Zweig*. Reinbek b. H. 1988, S. 75. Zitiert nach Anmüller, Matthias: Erzählformen. In: *Stefan Zweig Handbuch*, S. 625-634, hier S. 627.

⁶ 『アモク患者』、『女の生涯の二十四時間』、『異常な夜』、『知らない女からの手紙』、『月光小路 (Mondscheingasse)』が収録された小説集『アモク (Amok)』(1922) は『ある情熱の物語 (Novellen einer Leidenschaft)』という副題を持つ。

⁷ それぞれの作品のあらすじは、3 章で紹介する。

⁸ 『知らない女からの手紙』と『異常な夜』は、外枠の語り手が三人称で、枠内物語はそれぞれ手紙と手記の形をとり、その中で枠内の語り手は打ち明け話をする。また、中編小説『感情の混乱 (Verwirrung der Gefühle)』(1927) は外枠を持たず手記の形をとるが、その手記でも語り手が行うのは告白である。このように「定型」を外れるものでも告白をテーマにした作品は多く、ツヴァイクにとって大事なテーマだったことが分かる。

⁹ Vgl. Stocker, Peter: Rahmenerzählung. In: Müller, Jan-Dirk (Hrsg.): *Reallexikon der deutschen Literaturwissenschaft*. Bd. 3. Berlin / New York 2003, S. 214-216; Jäggi, Andreas: *Die Rahmenerzählung im 19. Jahrhundert. Untersuchungen zur Technik und Funktion einer Sonderform der fingierten Wirklichkeitsaussage*. Berlin / Bern / Frankfurt a. M. / New York / Paris / Wien 1994.

は、論考の途中でツヴァイクの『アモク患者』に寄り道をする。そしてその枠を「点景物 (Staffage)」¹⁰ と呼ぶことで、ツヴァイクを 1898 年に没した C・F・マイヤーよりもさらに時代遅れの作家に位置付けるのである。¹¹ シュトラートマンが批判するのは、外枠の語り手が自らの立ち位置を内省せず、「観察者」¹² の域を出ていないことだ。また、ツヴァイク・ハンドブックの一項目「物語の形式」でアンミュラー (2018) は、ツヴァイクの文学的保守性の指標として最初に枠形式の頻用を挙げている。¹³ そして、ツヴァイクが多くの作品に引き入れた外枠の語り手について、留保をつけつつも「装飾的」¹⁴ に見える、と書いている。¹⁵

このようにツヴァイクがしばしば採用した枠構造は、人によっては点景物に例えたくなるほど余計なものだ。外枠と「私」が取り払われて、枠内物語が三人称小説か内的独白の小説として独立した方が、作品としてはずっとすっきりするように思える。いったい枠は何のためにあるのか。

ここで、「論究されるべき高尚文学」と「それ以外」を切り分ける風習に従ってこの作家を後者にカテゴライズし、そして「ツヴァイクは何も考えずに前時代の型を真似していた」と説明してしまえば、枠をめぐる疑問は解決したことになるのかもしれない。しかしそれはできない。なぜなら度重なる枠の使用とそれによって生じる無意味な冗長さが、『昨日の世界』の中でツヴァイクが表明する文学観と矛盾しているからだ。『昨日の世界』でツヴァイクは、どうして自分が世界的なベストセラー作家になれたのか、その理由に考えをめぐらせる。そしてそれを読むときの「個人的な悪徳」(WG 365)、つまりこらえ性のなさに見出す。

小説、伝記、精神的議論におけるあらゆる寄り道、耽溺ぶりやら漠とした熱狂、不明瞭で不確かなこと、余分でぐずぐずした要素が私を苛立たせる。一ページ一ページが常変わらぬ高みを保って、最後のページに至るまで一息に読み手を引きさらっていく、そういう本しか私は面白がって読めない。これまで手にした本のうち十冊中九冊までが、余分な描写、口数の多い会話、不必要な脇役たちのせいで、あまりにも散漫で、そのためにスリルやダ

¹⁰ Stratmann, Gerrit: *Rahmenerzählungen der Moderne. Situation und Gestaltung einer Erzählform zwischen 1883 und 1928*. Marburg 2000, S. 99-106, hier S. 106.

¹¹ Vgl. ebd.

¹² Ebd.

¹³ Vgl. Anmüller, S. 625.

¹⁴ Ebd., S. 631. アンミュラーは外枠の語り手が物語に関与した例外的な作品として『チェスの話』を挙げる。またアンミュラーは、ツヴァイクの枠は「装飾的」なものに見えるとしつつも、『異常な夜』で枠構造の伝統的な役割である「本当らしさ」の付与が行われていると指摘して、枠の意味を救おうとしている。しかしこの記述はツヴァイクの文学的保守性以上のものを示せていないだろう。

¹⁵ ターナー (1981) はツヴァイクの枠の意味を積極的に主張する数少ない論者である。ターナーは、ツヴァイクの枠が無意味とされていることを踏まえた上で、作家が作品を通して伝えようとしていた博愛の精神と枠を結び付け、枠は作品全体の解釈に必要な不可欠なものと主張する。Vgl. Turner, pp. 116, 126-128. ただし本論と違って精神分析とは関わらせていない。

イナミックさを欠いていたと思う。(Ebd.)

「最も有名な古典的傑作を読むときですら」(ebd.) まどろっこしさを感じていたツヴァイクは、「個々に過剰な箇所を徹底的に削り落として」(WG 366) こうした名作を売り出してはどうかと出版社に持ち掛けていた。そもそも作家になったのも、他人が書いた作品の冗長さに耐えられなかったからだという。そういうツヴァイクが書く側に回ったときの「本当の仕事」(ebd.) とは、物語をゼロから立ち上げる作業ではなく、清書や校正の段階で繰り返し「凝縮し、構成する」(ebd.) こと、つまり、原稿から無駄だと思われる要素を無限に削り取っていく作業だった。ツヴァイクの回顧は続く。

よく覚えているのだが、かつてこんなことがあった。私がひときわ満足げに仕事机から立ち上がると、妻が、今日は抜群にいいことがあったみたいだねと言った。それで私は自慢げにこう答えたものだ。「うん、またひと段落丸ごと削除できて、一段と運びが良くなったんだ。」私の本について、人をとらえて離さないテンポを褒められることが時々あるのだが、この特質は生まれもった激情や内なる激昂などでは決してなく、ただ余分な間や雑音を絶え間なく排除していく体系的な方法に由来している。私が何らかの技術を知っているとしたら、それは捨て去ることができるという技術だ〔中略〕。(WG 367)

研究者は、ツヴァイクの物語における外枠の必要性に多かれ少なかれ疑念をさしはさむ。しかし自分や読者の読み心地のよさにひたすらこだわって、物語の筋にとって余分な要素を徹底的に削ぎ落とすことを信条とするツヴァイクは、外枠を残すことを選択した。残すどころか、複数の作品に繰り返し積極的に導入しているのである。ということは、ツヴァイクにとって枠は全体の筋書きのために必要不可欠なものだったと言える。¹⁶ ツヴァイクは枠構造それ自体に、何らかの意義を見出していた可能性がある。そして先に述べた通り枠構造の導入によってもたらされるのは、多くの場合、枠内の語り手の告白を「私」が聴く、という文脈である。

本論ではこの意義を、精神分析の創始者ジークムント・フロイト(1856~1939)との関係に求める。フロイトとツヴァイクは同じウィーンに生まれ、二人ともユダヤ系の出自を持つ。フロイトが晩年を除いて生まれ故郷を拠点にした一方で、ツヴァイクは世界中を旅して回った。それでもなおオーストリアに対して生涯持ち続けた愛着は、『昨日の世界』で語られる通り(WG 455f.)である。二人の間では1908年以降、フロイトが病没する1939年まで、断続的に手紙が

¹⁶ この矛盾を説明するために、「ツヴァイクは枠を外しては書けない作家だった」という仮説を立てることはできない。動揺する心理に焦点をあてた『不安(Angst)』(1913)、『圧迫(Der Zwang)』(1920)は、枠を使わない、三人称小説である。『感情の混乱』(注8参照)も枠構造を使っていない。

交わされている。その中でツヴァイクは、フロイトへの敬意をたびたび表明している。そしてそれは軽薄な社交辞令でもなかった。例えば 1925 年の評伝『デーモンとの闘い ヘルダーリン、クライスト、ニーチェ (Der Kampf mit dem Dämon. Hölderlin, Kleist, Nietzsche)』では、フロイトにほとんど熱狂的な献辞を捧げているし、本論でも後に紹介する 1931 年の評伝『精神による治療 メスマー、メリー・ベーカー＝エディ、フロイト (Die Heilung durch den Geist. Mesmer, Mary Baker-Eddy, Freud)』では、一章丸ごとフロイトに割いている。また、1926 年と 1936 年、それぞれフロイトの 70 歳、80 歳の誕生日には公開の祝辞を送り、そして 1939 年の葬儀では弔辞を読んでいる。残された往復書簡を読むと、1938 年、ヒトラーによるオーストリア併合に際してフロイトがロンドンに亡命してきたときにも、3 年前から同地に住んでいたツヴァイクは、長年癌を患う 82 歳の友人のことをしきりに気にかけていたことが分かる。このようにフロイトとツヴァイクを長年にわたって親しく結び付けていたのは、¹⁷ 人間の心理という共通の関心事だった。¹⁸ ツヴァイクはフロイトに、「今や私にとって心理学（あなたはそれを誰よりよく理解しているでしょう）とは、私の原動力そのものです」（1926 年 9 月 8 日, BW, 142）と書き送っている。

フロイトといえば、患者に話をさせることによって治療を行ったことで 20 世紀前半の精神医学界に革新をもたらした人物である。フロイトが自らの手法を編み出す大きな契機となったのが、医師ヨーゼフ・ブロイアー（1842~1925）との共著『ヒステリー研究 (Studien über Hysterie)』（1895）だった。この本には合計 5 本の症例が収録されている。そのうちブロイアーが診た患者アンナ・O は、催眠下でブロイアーに自分の妄想を話すと気楽になることに気づき、その過程を自ら「お話療法 (talking cure)」と名付けた。ブロイアーは話をさせることですっきりさせるこの治療法を「カタルシス療法」と呼んだ。フロイトはこれを大幅に加工し、精神分析の手法を編み出していく。当時の精神医学では、脳に精神疾患の原因を求める身体器質論が最高位を占めると同時に、行き詰まってもいた。器械を使うのではなく、患者と医者間で言葉を交わし、両者の関係性を利用して行われる治療は、医学史上の画期をなすものだった。

もちろんフロイトの革新性は、「話をさせること」だけに還元されるものでは全くない。しかし、そもそもフロイトの精緻な理論やその方法論の詳細は理解されづらいものだった。誕生し

¹⁷ ツヴァイクがフロイトから精神分析の診察を受けていたかどうかは、残された資料からは判断できないという。Vgl. Sohnemann, Jasmin: Zwei Psychologen und ihre Freundschaft. Stefan Zweig und Sigmund Freud. In: Müller, Karl (Hrsg.): *Stefan Zweig – Neue Forschung*. Würzburg 2012, S. 73-98, hier S. 79.

¹⁸ 以下はツヴァイクの心理学的関心について述べるとき多くの研究によって引用されてきた『アモク患者』の一節である。「謎めいた心理的事柄は不安を煽る力を持って私に覆いかぶさる。私は血管の隅々まで刺激され、因果関係を炙り出そうとしてしまう。奇妙な人間が存在しているというただそれだけのことで、認識欲という情熱に火がついてしまうのである」(AL, 77)。この「私」とは「外枠の語り手」だ。この一節が先行研究においてツヴァイクの心理学的関心を説明するために引用されていることは、多くの研究者が枠物語において外枠の語り手と作家を同一視している証拠でもある(注 4 参照)。

てからナチス・ドイツに弾圧されるまでの間を精神分析の初期に位置付けることができるが、精神分析はその頃から人々に正しく理解されていなかった。¹⁹ 精神医学史家ショーターによると、当時アカデミズムの領域で精神分析に注目したのは身体器質論的精神医学の修行を積んだ名の知れた精神医学者ではなく、むしろ駆け出しの若者たちだった。そしてこうした若い精神科医たちが関心を寄せたのは、その細かい理論ではなかった。当時の若手の医師が引き出し、実践のレベルに持ち込んだ精神分析のエッセンスとはむしろ「医師 - 患者関係」²⁰ を十分に利用すること、つまり医師と患者が話し合うことそのものだったのである。ここで一つ、当時の実際の言説を見ておきたい。作家アルフレート・デーブリー（1878~1957）は、1905 年に精神医学の分野で博士号を取得している。精神病院で勤務したあとは、開業した健康保険診療所で医療行為に携わっていた。そんなデーブリーは 1923 年、『精神分析の実践』と題したエッセイで、「精神分析が行っていることはそもそも何なのか？ それは、人に、自分について喋らせるものである（Sie läßt die Menschen sich aussprechen）」²¹ と断言している。続けて精神分析のことを「心の排水設備、内なる下水道」²² と呼び、さらには「科学的に形作られた告解（wissenschaftlich gestaltete Beichte）」²³ であるとも言い切って、「話をさせること」の医学的実践における効果を肯定している。²⁴ この「話す」という要素こそが当時の患者にもまたアピールし、大衆の間に広まったのである。²⁵

本論が注目するのは、患者が医師に話をするというこの構造、つまり精神分析に対する通俗的なイメージが、ツヴァイクの枠構造と似ていることだ。つまり「患者」と「医師」の関係性を、自分の内面について話す「枠内の語り手」とそれを傾聴する「私」の関係性に重ね合わせることができるのである。

なお、枠構造と精神分析を結び付けるアイディアが荒唐無稽ではないことを示す証拠として、ツヴァイクの個々の作品における告白のモチーフと精神分析の類似を指摘した研究はすでに存在する。精神分析と小説との並行関係を探ったシュトレルカ（1982）は、『アモク患者』の枠内

¹⁹ Vgl. Cremerius, Johannes: Einleitung des Herausgebers. In: Ders. (Hrsg.): *Die Rezeption der Psychoanalyse in der Soziologie, Psychologie und Theologie im deutschsprachigen Raum bis 1940*. Frankfurt a. M. 1981, S. 7-29.

²⁰ エドワード・ショーター『精神医学の歴史 隔離の時代から薬物治療の時代まで』（木村定 訳）青土社 1999 年、196 頁。

²¹ Döblin, Alfred: *Praaxis der Psychoanalyse* (28. 6. 1923). In: Ders.: *Alfred Döblin. Kleine Schriften*. Bd. 2. Hrsg. von Anthony W. Riley. Olten / Freiburg i. Breisgau 1990, S. 270-274, hier S. 270.

²² Ebd., S. 272.

²³ Ebd., S. 274.

²⁴ 一方でデーブリーは精神分析の理論的な側面については「けったいな思弁癖、えせ哲学、形而上学」(ebd., S. 273) と強い言葉で批判し、その専門用語を「わけの分らない言葉 (Kauderwelsch)」(ebd.) と呼ぶ。なおデーブリーを大学で指導した精神医学者アルフレート・ホッヘは、精神分析の激烈な敵対者だった。

²⁵ ショーター、196 頁以下。

の語り手の語り口に、精神分析的な意味での「抑圧願望と告白衝動の間の緊張関係」²⁶ を見て取る。またマルテンス（1987）は、特に『アモク患者』を取り上げながら、より直接的に「お話療法」との関連を示し、枠内の語り手の語りを「カタルシス的な言葉」とする。²⁷ さらにゾーネマン（2012）も、『女の生涯の二十四時間』と『感情の混乱』において告白という行為が行われていることを、精神分析と結び付けている。²⁸

本論はこうした研究を引き継ぐものである。そして同時に、次の点で差異化をはかる。一つは作品の選定基準である。これらの研究は、数ある告白型の小説の中から偶発的に選んだ個別の作品について言及している。本論は枠構造という 19 世紀の時代性を強く帯びた形式に範囲を区切って検討を行うことで、そのアクチュアリティについて再考する。さらに、これらの研究は告白の構造と精神分析が似ているという印象を簡単に指摘するに留まり、それ以上の論考を行っていない。それに対して本論は枠構造と精神分析の関係を議論の中心に据え、両者の類似点と相違点、さらにそこから導き出される意義について考察することを目指す。

続く 2 章で、ツヴァイクがフロイトのどの点を最も評価していたのかについて、評伝『精神による治療』（1931）や二者の往復書簡を使って検討する。具体的には、ツヴァイクがフロイトの「理論」を軽視しており、むしろその「勇気」に共感していたことが確認される。そのことを下敷きにして 3 章以降では、精神分析とツヴァイクの枠物語群の比較を行う。そこでは枠構造と精神分析の類似点を示すと同時に、確実に存在するフロイトとの相違点について詳しく考察する。最後の 4 章で、精神医学史における精神分析の立ち位置を踏まえた上で、19 世紀的というレッテルのもと等閑に付されるツヴァイク作品の枠の意義について考え直してみたい。

2. フロイトの勇気、フロイトの理論

ツヴァイクはフロイトの何を最も評価していたのか。評伝『精神による治療』のフロイトの章に言及するゾーネマンはそれを、「タブーを打ち破る勇気」²⁹ と言い当てている。ゾーネマンはツヴァイクが広く「心理学者」と呼んだドストエフスキーとニーチェの評伝とともに考察し、この 3 人の共通点を炙り出している。そのため総括的な考察を行えている一方で、精神分析の特性にはあまり深入りしていない。本章ではゾーネマンと同じくツヴァイクがフロイトの「タブーを打ち破る勇気」を重んじたことをまずは確認する。さらに、『精神による治療』をより詳

²⁶ Strelka, Joseph P.: Psychoanalytische Ideen in Stefan Zweigs Novellen. In: *Literatur und Kritik* 169-170 (1983), S. 42-52, hier S. 46.

²⁷ Martens, Lorna: Geschlecht und Geheimnis. Expressive Sprache bei Stefan Zweig. In: Gelber, Mark H. (Hrsg.): *Stefan Zweig heute*. New York / Bern / Frankfurt a. M. / Paris 1987, S. 44-64, besonders S. 52f.

²⁸ Vgl. Sohnemann, S. 82f.

²⁹ Ebd., S. 91.

しく読むことで、精神分析独自の「勇気」の内実やその位置付けについても確認したい。³⁰

『精神による治療』は序論に始まり、アントン・メスマー（1734~1815）、メリー・ベーカー＝エディ（1821~1910）、そしてフロイトの活動と生涯を綴った章が続く。この3人のうち、フロイトは出版された時点で唯一存命の人物である。ゾーネマンと同じように『精神による治療』のフロイトの章を読んでみると、事実そこで強調されているのは「幻想破壊者（Antiillusionist）」（HG, 287）としての側面だ。³¹ ツヴァイクは「過去の社会道徳」（HG, 285）を偽善的とした上で、フロイトが「人間の欲動界」（HG, 275）、つまり「個々人の攻撃的、性的、反体制的な傾向」（HG, 276）を「抵抗」（HG, 275）に逆らって暴き立てたことを評価する。「医学の一番大切な使命は、人々の最も秘匿すべき事柄を沈黙させることではなく、むしろ反対に、それを語らせることである。秘匿したがる世紀の空気を無視して、フロイトは抑圧されたものと無意識の自己認識と自己告白という諸問題を、時代のど真ん中に投げ込んだ」（HG, 286）という文言から分かるように、ツヴァイクにとって精神分析は「隠蔽のかわりに暴露」（HG, 285）を要求するものだった。

さらに、本論では「序論」からも「勇気」の内実を確認しておきたい。序論では導入として、メスマー、ベーカー＝エディとフロイトを同列に扱った理由、言い換えると、ツヴァイクが三者の間に見出した共通項が説明されている。³² ツヴァイクはまず医学の歴史を俯瞰する。原始時代、人は神の意志で病気にかかると考えられており、医学と神学は未分化だった。しかし近代に至って、科学は神学から独立する。それとともに病気は「心的な全体現象」（HG, 13）から、「個別の、完全にカタログ化された数えきれない疾患」（ebd.）へと細分化されてしまったという。この転換は特に、19世紀に加速する。なぜなら「治療される者と治療する者の間に第三の、まったく無機的な物質が押し入ってきたからである。つまり器械が」（HG, 14）。そこでは「医師と患者の間の心的な接触の閃光一つ発火する暇もない」（HG, 15）。しかしこうした非人格化に染まる大学医学に対抗する人々がいた。ツヴァイクはこうした「個人の、独立した医師たち」（HG, 17）の活動を、フランス革命に例えて絶賛する。要するに、主流だった器質論的な医学

³⁰ なおクレメリウス（1995）やコリー（2007）、アンツ（2018）らも、『精神による治療』とそれについて二人の間に交わされた手紙を取り上げ、詳しく論じている。Vgl. Cremerius, Johannes: *Freud und die Dichter*. Freiburg i. Breisgau 1995, S. 23-60; Kory, Beate Petra: *Im Spannungsfeld zwischen Literatur und Psychoanalyse. Die Auseinandersetzung von Karl Kraus, Fritz Wittels und Stefan Zweig mit dem „großen Zauberer“ Sigmund Freud*. Stuttgart 2007, S. 229-274; Anz, Thomas: *Psychologie und Psychoanalyse*. In: *Stefan Zweig Handbuch*, S. 73-85, hier S. 76-81.

³¹ Sohnemann, S. 87.

³² 自分の評伝が執筆されていると知ったフロイトは出来上がりへの期待をツヴァイクに書き送る（1929年12月7日, BW, 149/1930年8月14日, BW, 152）。その裏で、友人アーノルト・ツヴァイクに宛てた手紙では、評伝など鬱陶しいと愚痴をこぼしている。当時の科学者から評価されていなかったメスマーやベーカー＝エディと並べられることが、実証的科学主義の洗礼を受けたフロイトにとっては不愉快だったらしい。Vgl. Anz, S. 79. フロイトと実証的科学主義の関係については金関猛『ウィーン大学生フロイト 精神分析の始点』中央公論新社 2015年参照。

に真っ向から戦いを挑んだ人々の勇気を讃えている。

このような人たちの戦いの実相を、ツヴァイクは次のように説明する。いわく、旧来の「科学的医学は病人とその病気を客体にとらえ、病人に、まったくの受動性というほとんど侮蔑的な役割をあてがう」(HG 19)。その一方で、「精神的な治療は、病人自身が精神的に行動し、主体として、つまりは治療の担い手、主要遂行者として、病に対してできる限り強力な能動性を示すことを要求する」(ebd.)。その能動性を引き出す治療の鍵とされるのが、「ロゴス、すなわち創造的な言葉」(HG 20)である。ここでは、魔的な力を持つ言葉が無機質な器械と対置されて称揚される。精神による治療を行う者は、「話しかけやまなざし、すなわち人格から人格へとサインを送る行為」(ebd.)によって治療を行うのである。こうした人々の範例としてツヴァイクは、メスマーとベーカー＝エディの系譜にフロイトを付け加えたのだ。

まとめると、ツヴァイクがフロイトについて評価した勇気には、おそらくはっきり分けられるものではないが、二種類のものが読み取れる。一つは欲動界というタブーに踏み込んだ勇気であり、もう一つは、器質論的精神医学の流れに真っ向から立ち向かい、医療の現場に言葉を取り入れて患者の主体性を尊重したことである。そして戦いを続ける勇気ある姿勢³³によってフロイトが成し遂げた偉業とは、「個人の重要さ、あらゆる人間の魂のかけがえのない一回きりの価値」(HG 380)を世間に認識させたことだった。

注目すべきは、フロイトの章で、勇気やそれによる功績と、精神分析の「理論」そのものが、はっきり対立する概念として扱われていることだ。例えば、「その功績の細部のいくつかには議論の余地があるかもしれないが、個別のことが何だというのか！」(HG 290)と理論への批判をあらかじめ牽制した上で、より重要なことは「精神的なものの優越に対する信仰」(ebd.)を高めることだと述べる。そしてフロイトは「真実への勇気を持っている」(ebd.)ことで、まさにそれを成し遂げたという。

この一節からは、功績の全体像を示すことによって、精神分析理論に浴びせられる山のような批判からフロイトを擁護するツヴァイクの姿が浮かび上がる。しかしツヴァイクの精神分析理論に対する態度は、人格の絶賛に忙しくて理論の詳述にはエネルギーを割けなかった、という消極的な性格のものではない。むしろツヴァイクにはフロイトの敵対者たちと同じく、精神分析理論を積極的に軽視している節がある。次の例がそのことを如実に物語っている。ツヴァイクはエディプス・コンプレックスについて、フロイトが理論の「基柱」(HG 359)として非

³³ 独立不羈のフロイトの態度を、ツヴァイクが非常に高く評価していた証拠が他にもある。その大学での昇進の遅さを誇張して書いているのである。クレメリウス(1995)はツヴァイクの誇張癖を難じる文脈で、1926年、70歳の誕生日に寄せた祝辞で、フロイトがいまだ正教授の席につけていないと書いたことに言及する。しかし実際は1920年の時点でフロイトはこのポストを得ていたという。Vgl. Cremerius (1995), S. 32. なおツヴァイクは『精神による治療』でも、フロイトが「正教授になることは決してなかった」(HG 305)と書いている。

常に重んじていたことを確認する。そして直後に、「一方私にはそれは、建築作業が終わったあとに心配なく取り除ける支柱の一本以上のものに思われない」(ebd.)とわざわざ断りを入れるのである。

さて、フロイト自身は『精神による治療』を好意的に受け止めたとは言い難い。フロイトにとって最も不満だったのが、まさに理論への言及の少なさ、あるいはしばしば挟まれる理論を軽んじる発言だった。読後に送った手紙でフロイトは、「おそらく思い違いではないはずですが、あなたはこの本をお書きになるまで精神分析の学説のことをあまりご存じなかったのではないのでしょうか」(1931年2月17日, BW, 155)と皮肉っぽく伝えている。クレメリウス(1995)の言う通り、ツヴァイクがこの時点までに精神分析に関する文章をあわせて4本発表していることを考えれば、この非難はショッキングなものだ。³⁴ ツヴァイクは次のように応答する。

方法論や体系を批判的に観察することは私の義務では全くなかったのです——そのために必要な知見も大胆さも私は持ち合わせていません。私が試みたのは、現象の重要性、優れて一回的なお人柄、そして功績の全体像を、詳しく描き出すことでした。(1931年2月20日, BW, 156)

ツヴァイクはさらに「個別の見逃しはどうかご海容いただければと思います。あなたの功績の全体像、ご著書の重要性について私ほど心の底から知り抜いている者はそうそういないということにどうぞご留意ください」(1931年2月20日, BW, 157)と言っている。この著作はそもそも理論の詳述を目指していないのでそれが杜撰になっているのは仕方がない、そのかわりより大事な「功績の全体像」をしっかり描いているのでそれに免じて許してほしい、ということだ。

ツヴァイクの言動はとても軽薄なものに見えるかもしれない。しかし実は、ツヴァイクが理論ではなくその成し遂げた全体像を評価していると主張するのはこのときに始まったことではない。先に述べた通り1925年の『デーモンとの闘い』でフロイトに献辞を捧げているが、そのとき交わした手紙の中にすでに、この傾向ははっきり表れている。またこの手紙は、自身の創作活動への影響について語ったものだ。ツヴァイクは「いくつかの章〔中略〕はあなたがいないければ書けなかったものでした」(1925年4月15日, BW, 135)とした上で、次のように続ける。

しかしそれらの章が精神分析の方法論の結果だと言いたいものではありません——あなたは我々に、物事に近づく勇気をご教示くださったのです。恐れを知らず、また最も極端な感情にも内なる感情に対しても誤った羞恥心を感じることなく、近づいていく勇気です。

³⁴ Vgl. Cremerius (1995), S 32f.

(Ebd.)

フロイトの「勇気」の対立項として、「方法論」、つまり細かな理論を掲げた上で、自分の創作においてはその二者にはっきり軽重の差をつけて受容する。このことをツヴァイクは、1925年の時点で明言している。さらに1926年、小説集『感情の混乱』に対して精神分析の理論に即した批評をフロイトから受けたときには、「もう一度はっきり申し上げます」(1926年9月8日, BW, 142)と前置きして、次のように弁明している。

私が、そしてたくさんの人があなたに負っているのは、他でもない、心理学における勇気なのです。あなたは、一時代の多くの文学活動家たちと同様、抑圧を取り去ってくださったのです。あなたのおかげで私たちは多くを見ることができるようです。あなたのおかげで多くを口にできるようです。あなたがいらっしゃらなければ、見ることも口にすることもできなかつたろうことどもを。(Ebd.)

当時の道徳規範に抗って欲動界を暴き出した勇気、器質論的な精神医学の動向に抗い言葉による治療を行った勇気。そうした姿勢によって、個人のかげがえのなさを認識させたこと。ツヴァイクはそれらに強い感銘を受けていたらしい。ツヴァイクが文学上のメインテーマにしていたのは、市民社会の中で抑圧された個人的な感情、作家の好んだ言葉を使うなら「情熱」だった。そして感情の抑圧はフロイトの精神分析の主題でもあったから、ツヴァイクが共感を寄せたのはまさにそうしたものを扱う点だったのである。この好意的な態度と対照的に、ツヴァイクは、フロイトの個別の理論については些事であると一蹴し、作品からも切り離していた。残された資料からはそのように読み取れる。

3. 類似と違い

3-1. 「私」と「枠内の語り手」は診察室にいる

以下の章は、精神分析とツヴァイク作品の間の比較によって構成される。ツヴァイクの小説と精神分析を並べて論じる場合に思いつきやすいアプローチ方法の一つが、小説の内容にエディプス・コンプレックスをはじめとする精神分析理論や自我の不確実性といった思想面の投影を探る試みだろう。2章で確認されたツヴァイクのフロイトへの姿勢は、こうした試みに対してとても示唆的なものである。理論の導入を作品に読み取ろうとすると、ツヴァイク自身があちこちで口にしている理論への無関心と矛盾してしまうからだ。³⁵ 理論よりも勇気に感銘を受

³⁵ シュトレルカは、ツヴァイクの小説と精神分析理論の間の対応関係を読み取っている。ただしこの

けたとツヴァイクが言っている以上、比較を行うにしても、注目すべきは勇気の方だと考えられる。

理論よりも暴露する勇気にはるかに強く共感する、というツヴァイクの態度に注目すれば、フロイトの精神分析とツヴァイクの枠構造の間に接点が見えてくる。暴露という行為が最も直接的に文学に落とし込まれるとしたらどういうことになるか、考えてみたい。それはある人が別の誰かに自分の秘密を告白している現場を描くという形をとるのではないだろうか。そういう状況を作り出すために効率的なのは、三人称小説でも内的独白の小説でもない。外枠を導入し、「私」という忠実な聴き手を作中に登場させることだろう。

この点にツヴァイクが、不要と片付けられる枠をわざわざ導入し続けた理由を仮定してみた。また、「私」をわざわざ作中に取り込むことで生まれる効果と精神分析の間の類似点はもう一つある。先に述べた通り、器械を介さず医師と患者が向き合うことで行われる精神による治療においてツヴァイクが評価したのは「個人の重要性、あらゆる人間の魂のかけがえのない一回きりの価値」(HG 380)が重視されることだった。ある人が自分の人生を振り返る話に「私」が耳を傾ける物語の体裁は、「私」がいない場合よりも、個人の尊重という価値を分かりやすく実現する。

こうして「私」と「枠内の語り手」の関係を、精神分析における「医師」と「患者」の関係になぞらえてみると、面白いことに気が付く。ツヴァイクの作品では、ある人が初対面の相手に対して、世間話もそこそこに、自分の内面について隅から隅まで語り尽くそうとする。そして聴き手は聴き手で、相手が話してくれるからといって他人のプライベートの話を最後まで聴き続ける。これらの出来事が起こるのは、船上や保養地のホテルの一室だ。しかしこうした状況の舞台として最もふさわしいのは、むしろ診察室ではないだろうか。精神分析家の診察室では患者はきっとたくさん自分のことを話すだろうし、医師はそれに耳を傾けるだろうから。そして患者と医師は多くの場合初対面なのだ。

もちろん本論は、ツヴァイクが枠物語を書くときにフロイトを念頭に置いていたと証明しようとしているのではない。ただ少なくとも、ツヴァイクの作品と精神分析の類似点としてこれを指摘したとしても、エディプス・コンプレックスとの類似と違ってツヴァイク自身の発言と齟齬を来すことはないだろう。

論文も結局、精神分析理論との「類似性」を示すに留め、作品を精神分析に「還元」することには反対している。Strelka, S. 51. また、フロイトとツヴァイクの関係を小説に限らず往復書簡や評伝、伝記物や祝辞といった幅広い側面から検討するコリーは、フロイトからの絶対的な影響を確言しつつも、ツヴァイクは「精神分析のコンセプトを文学に置き換えることは決してなかった」(Kory, S. 325)とする。コリーによればツヴァイク作品の心理描写はもともと作家に備わっていた心理洞察のセンスに由来するもので、そこに精神分析の知識がいくらか結び付いているに過ぎないのである。

3-2. 暴露をめぐるすれ違い

3-2-1. アンナ・Oの症例にまつわる事実誤認

両者の間には暴露を重んじるという類似点が指摘できる。しかしそれが行われる手法については、違った認識を持っていたようだ。残された手紙から判断する限り、『精神による治療』にフロイトは二度にわたって苦情を寄せている。一度目は本が手元に届いた直後の1931年2月17日のこと。この手紙は2章で紹介した、理論へのツヴァイクの理解度を疑う文言を含んでいる。二度目は一年以上経った1932年6月2日のことだ。フロイトはイタリア語版で『精神による治療』を読み返し、この度新たな間違いに気付いた、とわざわざ書き送っている。1931年の手紙に、ツヴァイクはすぐさま釈明を行っていた。それを承知でなお、フロイトは伝えたかったようだ。その間違いは、精神分析誕生に大きな影響を与えた『ヒステリー研究』のアンナ・Oの症例における、ブロイアーの試みに関するものである。フロイトの手紙の前に、まずは『精神による治療』の該当箇所を確認しておく。

そして実際、その〔ブロイアーの、論者注〕試みは成功した。あらゆる羞恥心がいわば霞んだ催眠状態で、少女は、それまで頑なに医者にも、そして何より自分自身にも黙っていた事柄についてありのまま打ち明けた (sagt das Mädchen frei heraus) ののである。すなわち、少女は父親の病床である感情を抱いていて、それを抑圧していた。つまりこの礼儀を慮って抑圧されていた感情は、姿を変えてあの病的な症状になっていた、というよりむしろそれを作り出していたのだ。というのも少女が催眠状態でこの感情をありのまま告白すると、すぐにその補償現象であるヒステリーの症状は姿を消すのである。(HG, 307)

先に述べた通りヒステリー患者のアンナ・Oは、催眠術をかけられた状態でブロイアーを相手に妄想を話すと症状が消えることに気付き、自ら「お話療法」と名付けた。ブロイアーはこのように、患者に語らせてすっきりさせる手法を「カタルシス療法」と呼んだ。ツヴァイクは、ブロイアーが催眠をかけたことによってアンナ・Oが自発的に全てを告白したと書いている。この部分について、フロイトは次のように指摘する。

そこには次のように書いてあります。催眠状態にあるブロイアーの病人が、とある「許されざる感情」(性的な性質の)を父親の病床で感じ取り、さらにそれを抑圧した、と告白した。実際には彼女はそれに類することを口にしていません。自分のパニック状態、とりわけ病人に対する優しい気遣いを隠そうとしているということを、彼女はただ気取らせたに過ぎません。(1932年6月2日, BW, 161)

これはフロイトの理論の根幹に関わる誤りだった。フロイトは手紙の中で、ツヴァイクが自分の「功績」を気にかけていることを思い出させた上で、「些末なミスと言えるものではなく〔中略〕私の功績をも矮小化するものです」(ebd.)と指摘する。

ブロイアーのお話療法は、フロイトの手法の基本を形作るものだ。³⁶ しかし『精神分析入門講義』のフロイト自身の言葉によれば、「本当の精神分析は、催眠術の手助けを放棄したときに始まった」。³⁷ フロイトによれば、患者は病因となっている観念を自分では思い出すことができない。なぜなら患者はその観念を無意識の層まで抑圧してしまっているからで、治療者がその観念に迫ると抵抗を示す。フロイトにとっては「こうした抵抗を打ち負かすことこそが分析の本質的な仕事」³⁸ であり、一方で催眠は「抵抗がそもそも存在することを医師に認知できないように」³⁹ してしまうため、捨て去られなければならなかったのだ。抵抗を取り除くべく、催眠術のかわりにフロイトが用いたのが自由連想法である。精神分析家は患者に「あまり深く考えず、静かな自己観察の状態に自らを置き、内的な知覚をかすめるもの、例えば感情、思考、記憶などを、思い浮かんだ順番に余すところなく報告する」⁴⁰ ように求める。そのとき大事なものは、自分の頭の中に検閲をかけないこと、つまり「どれほどそれが口にするにはあまりに不愉快、あるいは無遠慮なものに見えても、あるいはあまりにどうでもいい、この場にふさわしくない、下らないから言う必要がないことに見えても」⁴¹ なお、全てを語ることである。分析家は、こうして語られた断片を分析して患者の無意識の層へと到達する。催眠術を放棄することによって生じたブロイアーとフロイトの決定的な違いは、「フロイトでは治療者の役割が大きくなっている」⁴² ことだ。ブロイアーは催眠術をかけて患者に話をさせ、あとは快癒するのを待っていた。催眠術を放棄することではじめて、治療者が治療行為に積極的に介入する、フロイトの方法が確立されたのである。フロイトの手紙は、次のように続いている。

あなたがお書きになった通りだとしたら、何もかもが違っていたと思います。私は性的な病因を発見して驚くこともなかったでしょうし、〔中略〕おそらく、そんなに正直な告白を引き出せる催眠術というものを放棄したりしなかったでしょう。ブロイアーの患者に実際は何が起こったかについて、私はブロイアーと決別して長いこと経ってからようやく思

³⁶ 以下、『ヒステリー研究』から精神分析が誕生した事情については、中山元『フロイト入門』筑摩選書 2015 年、28 頁以下参照。

³⁷ Freud, Sigmund: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. In: Ders.: *Gesammelte Werke. Chronologisch geordnet*. Bd. 11. 9. Aufl. Hrsg. von Anna Freud, E. Bibring, W. Hoffer, E. Kris und O. Isakower. Frankfurt a. M. 1998, S. 302.

³⁸ Ebd., S. 301.

³⁹ Ebd., S. 302.

⁴⁰ Ebd., S. 297.

⁴¹ Ebd.

⁴² 中山、45 頁。

い至ることができたのです〔中略〕。(1932年6月2日, BW, 161f.)

さらにフロイトは、「アンナ・Oは結局さらに数か月の間サナトリウムで頑張ってリハビリしていました」(1932年6月2日, BW, 162)とも指摘している。その詳細については諸説あるものの、ブロイアーは治療を放棄したのだ。⁴³ 本当はアンナ・Oは完治していなかったらしい。それはフロイトからすれば「性的な病因」に、アンナ・Oもブロイアーも思い至ることができなかったからだった。

ツヴァイクへの一通目の手紙で、フロイトは、自由連想法への言及の少なさに不満を述べている(1931年2月17日, BW, 155)。そのこととも呼応するミスだと言えるだろう。ただし「少ない」というだけであって、まったく言及がないわけではない。ツヴァイクは『精神による治療』の別の箇所で、患者は独力では自分自身の病因に思い至れないと確かに書いている(HG, 334ff.)。ツヴァイクも精神分析は分析家の介入で完成することを理解していたと言える。それでもなお、決定的な部分で書き間違いをしているという事実は残る。

ここから導き出されるのは、患者は自分の心の奥底に自分では到達できないというフロイトの理論の大原則を、ツヴァイクが、少なくともフロイトに見咎められるくらいには軽んじていたということだ。ツヴァイクは精神分析家の働きかけ、つまり患者の言葉の断片からその内面を再構築するという作業を、あまり重視していなかったのである。フロイトは催眠状態においても、人間は自分の心の奥底に自分の力では到達できないと考えていた。ツヴァイクは催眠状態に置かれさえすればそれができると考えていた。ツヴァイクは人間の自己認識の力に対してフロイトよりもはるかに強い信頼を持っていて、フロイトの著作を読んでもそれは揺るがなかったようだ。

3-2-2. 一人で「真実」に辿り着く枠内の語り手

そして、「患者」と「医者」の関係と、作中の「枠内の語り手」と「私」の関係の間に平行性を仮定してみると、このすれ違いはそこにも色濃く打ち出されていることが分かる。つまり、ツヴァイクの作品は、「人は自分の心の奥底を自分で把握できる」という人間観に貫かれているのである。このことを、作品に即して二つの観点から検討していく。一つ目は、「枠内の語り手」と「私」の間で、「真実」が隅々まで打ち明けられたということについて、合意が取れていること。それを前提にして検討されるもう一つの側面は、ツヴァイクの枠内の語り手が、しばしば自分の過去の状態について自ら診断を下すことである。

ツヴァイクの枠物語では、「枠内の語り手」と「私」の間で、ありのままの「真実」が語り尽

⁴³ 中山、66~70頁。

くされたという所感が共有されている。本論にとって大事なのは、枠内の語り手の話からさらにどのような新しく面白い解釈が可能か、ということではない。そうではなくて、二者が「真実」が語られたということに納得していて、枠内の語り手の話の真実性を疑いうる審級が物語の中に存在しないことである。まずは『アモク患者』の例を見てみる。この作品では、インドからヨーロッパへ向かう船上、挙動不審の医師が迷いながら「私」に話をする。語られる枠内物語は以下の通りである。オランダ植民地に駐在する医師のもとに身分の高い白人女性が訪れた。夫の旅行中に妊娠した女が中絶手術を依頼すると医師は見返りに肉体関係を求める。呆れた女が立ち去ると医師は熱帯地方の風土病であるアモクにかかったかのように女を追い回す。現地の貧民窟で手術を受けた女が死にかけているところを捕まえた医師は、女が黙秘を懇願しつつ失血死するのを看取り偽の診断書を書く。状況を怪しんだ夫から逃れるため医師は船に乗るが、同じ船に、検死のためヨーロッパに送られている例の女の棺と夫が乗り合わせていることを知った。これらを告白した医師は「私」に口外しないよう頼み、そのあと、積み荷降ろしの最中に棺と夫を巻き込みながら海に身投げする。医師は、話し始める前に「私」に話を聞いてくれるように頼む。そこにあるのは、全てを語ろうとしている医師の意志である。

「よければあなたにお願いしたいことが……つまり、お聞かせしたい話があるのです。〔中略〕ひどい精神状態にありまして……どうしても誰かと話さないといけないところまで来ているんです……そうしないともうおしまいだ……〔中略〕何というか、黙っていることで病気になってしまいそうで……〔中略〕」(AL, 79)

話が終わったあと、「私」は医師について「その卑屈な態度から、羞恥心を感じ取った。この晩、私にすべてを漏らしてしまったことへの限りのない羞恥である」(AL, 131)と観察する。「私」は、医師がどこかで嘘をついたとは微塵も考えない。対する医師も、「あなたの前で内臓を切り裂いて腸の糞便までさらしてみせた」(ebd.)と述べる。医師の方でも、自分は目の前の人間に偽りのない真実を語ったという所感を持っているのだ。

『女の生涯の二十四時間』にも、同じことが分かりやすく打ち出されている。外枠の舞台は保養地である。ひととき気品のあるC夫人が「私」に、二十年以上前のある一日について語る。夫に先立たれ息子もすでに独立していたC夫人は、休暇中に訪れたフランスのカジノで、ギャンブル依存症の男の手に突如として魅せられた。大負けしていかにも死のうという様子の男を引きとめようとC夫人はホテルに同行し、気付けば一夜を共にしていた。翌朝男は二度と賭け事に加わらないと教会で誓い、感謝の念を示す。C夫人は情熱のうちに駆け落ちを考えるが、その日のうちに男はカジノへ舞い戻る。公衆の面前で男に罵倒され逃げるようにフランスを去ったC夫人は、以後は再び上品な貴婦人として暮らした。枠内物語に入る前、「私」とC夫人の

間で次のような手紙が交わされる。

「〔中略〕もちろん、あなた〔C夫人〕が心に決めていらっしゃる以上のことまでお話するようにお願いすることなどできません。しかしお話するからには、どうぞ私に対してもご自身に対しても、ありのままの真実 (wahr) をお話ください。〔中略〕」〔中略〕

「全くもってあなた〔私〕のおっしゃる通りです。生半可な真実 (Wahrheit) に価値はありません、完全な真実だけに価値があるのです。自分自身に対してもあなたに対しても何も沈黙しないために、すべての力を振り絞ります。〔中略〕」(VS, 83f.)

二人の間で「真実」ということが、わざとらしいほどしきりに持ち出される。枠内物語の締めくくりに、夫人は次のように述べて、「真実」を語ったことを改めて確認する。

どうして私が突然自分の運命についてお話することになったのか、これでお分かりでしょう。〔中略〕こう思ったのです。一度お話することで心から離してしまえば、重苦しい呪縛も、いつまでも繰り返し立ち現れるこわばりも、もしかしたら解けてくれるのではないかと。〔中略〕あなたに何もかもご説明できてよかったです。これで気楽になりましたし、ほとんど愉快と言っていいような心持ちです……感謝いたします。(VS, 143)

これに対して「私」は「畏敬の念」(VS, 144)を覚える。夫人が全てを打ち明けたと考えているからこそ、「私」は強く心を動かされているのである。

この傾向は、はじめ『同情殺人 (Mord durch Mitleid)』のタイトルで構想された『心の焦燥』において最も顕著のように思われる。第二次世界大戦前夜、先の大戦でマリア・テレジア勲章を授与されたことで尊敬を集める退役軍人が「私」に、以下の長大な懺悔話を行う。第一次大戦直前、誰にも認められず何となく寂しい思いでいた若い軍人は、足の不自由な貴族の娘と知り合う。以来、娘に感傷的な同情を寄せて家族に感謝され、そういう自分に満足感を味わう。しかし軍人は無責任なので距離を置くとすぐその気持ちを忘れるし、自分の生活が左右されるほど娘に寄り添うのは嫌なのだった。それを知ったあとも軍人は感謝されるのが嬉しくて邸宅に通っていた。軍人の態度は自分に思いを寄せる娘を混乱させ最終的に死に迫りやる。当時の自分の「焦燥」のありさまを語る軍人は、罪悪感を忘れるために第一次世界大戦へ逃げ込み蛮勇を奮ったに過ぎないと分析的に告白し、内省をめぐらせる。退役軍人の話に入る前、「私」は次のように述べてから退場する。

退役軍人の報告に、私はほんのわずかししか手を加えてない。軽騎兵のかわりに騎兵とした

ところがあるかもしれない。駐屯地については、特定できないようにするためほんの少し地図上で動かしたし、正確な本名はすべて慎重に消し去った。しかし本質に関わることにについては勝手な想像で何か付け加えたりしていない。そして私ではなく語り手が、これから語り始める。(UH, 13)

このあと退役軍人を一人称の語り手とする枠内物語が延々と展開される。S. Fischer 社の全集の版では、軍人は 450 ページ近く一人で喋り続けている。以下は軍人の自己総括とも言える箇所だ。

確信していますが、8月のあの日に招集された数十万の者のうち、私ほど無関心に、いやそれどころか性急に、前線に突き進んだ者はほんのわずかだったでしょう。私が好戦的だったというのではありません。それは自分のための逃げ道、救出行為だったのです。私は暗闇に逃げ込む犯罪者のようにして、戦争に逃げ込んだのです。決戦までの4週間というもの、自己蔑視と混乱と絶望のうちに過ごしました。その頃のことを考えようとすると、今でも、戦場での凄惨極まる数時間のことを思い出すよりもぞっとします。というのも、そのとき私にははっきり分かっていたからです。私の弱さによって、はじめは誘惑的でそのうち逃避的なものにすりかわった私の同情によって、私は一人の人間を、それも私のことを情熱的に愛していた人間を一人、殺害したのだということを。(UH, 451)

この発言の真実性に疑いをかける審級は、作中には存在しない。軍人の心情の経過は論理性に貫かれて隙がないし、さらに軍人の発言の信憑性を揺るがしうる存在である「私」は、10 ページ足らずの導入部のあと、一度も作品に出てこないからだ。この作品は、外枠に戻らない。枠内の語り手の自己分析の終了とともに作品は終わる。

二つ目の観点の検討に移る。「自分で病名をつける」ことに関して、『アモク患者』はタイトルからして示唆的だ。タイトルは、枠内の語り手である医師が、熱帯地方の風土病である「アモク」の状態にあったと自己診断したことに由来する。医師はアモクについて、「酩酊よりもひどい状態です……錯乱状態です、人のかかる狂犬病の一種のようなものです……どんなアルコール中毒とも比べようのないような、殺人的で無意味な偏執狂の発作です」(AL, 101) と説明する。

また、『心の焦燥』でも同じような自己診断が行われる。軍人は、自分は「同情による奇妙な中毒」(UH, 58)にかかっていたと語り、その発端について、「はじめはただ漠然と感じていただけでした——ちょうど病人がぼんやりした頭で目を覚ますのと同じように——私の内部で何かが起こった、あるいは起こりつつあるということを」(ebd.) と振り返る。さらにその中毒が

引き起こす「症状」(ebd.)の様子について、「あたかも血液中に入り込んできた毒素が血を温めて、より赤くし、流れをよくし、脈打たせ、激しくしているかのような気分」(UH, 74)になったと事細かに説明する。軍人は続けて、こうした中毒にかかった原因を、子供時代から抱いていた「自分は全く不必要な人間で、誰からも面白いと思われたいし、どうでもいいと思われていたらまだましな方だという確信」(UH, 65)に求める。つまり軍人は誰の手も借りず、「病名」と「症状」にとどまらず「病因」まで一人で突き止めてしまうのである。

『チェスの話』の枠内の語り手も自己診断をする。この作品ではニューヨークからブエノス・アイレスへ向かう船上、オーストリアの名家出身のB博士が「私」に、ウィーンでゲシュタポの監禁を受けた際に陥った精神異常の経過を事細かに語る。精神的な拷問として何もないホテルの一室に閉じ込められたB博士は、苦悩のさなか、チェスの名局集を偶然手に入れた。以来頭の中で駒を動かす「目隠しチェス」に熱中することで尋問と拘禁生活をやり過ごす。しかし空想の中で自分自身を二手に分けてチェスを指すうち錯乱状態に陥り、やがて意識を失い、釈放される。船上で乗り合わせた世界チャンピオンを相手に本物のチェス盤に向かったとき、B博士は再び狂乱の兆しを見せる。すんでのところで「私」が制止し、B博士は静かにその場を立ち去る。博士は語りの中で、自分のことを「人工的精神分裂病 (künstliche Schizophrenie)、危険な興奮状態を混ぜ込んだ意識の分裂」(SN, 296)の状態にあったと述べ、「勝ちたい、征したい、自分自身を抑え込んでやりたいという渴望は、そのうち一種の怒りに育ち、私は焦燥に震えました。一方のチェスをしている私にとって、もう一方のチェスをしている私があまりにゆっくりしているからです。一方の私がもう一方の私を急かすのです」(SN, 298)と振り返る。なお続けて自分の様子を克明に物語る中で博士は、「チェス中毒 (Schachvergiftung)」という言葉を編み出す。

もちろん私は今では、この状態がすでに極度の興奮の完全に病理的な一形態に至っていたのだということをよくよく承知しています。その形態に名前を付けるとしたら、医学界がこれまで知らなかった名前しか思いつきません。チェス中毒です。(Ebd.)

まとめると、ツヴァイクの枠内の語り手は、心の奥底の「真実」に自ら到達するし、それに基づいて自己診断もできる。一方でフロイトは、患者は自力では「真実」に到達できないという認識をこそ、精神分析の土台にしたのだった。「真実」を語る主体をフロイトは医師に与える。対するツヴァイクはこれを枠内の語り手、つまり患者に与えたが、このことは『精神による治療』の序論で、「精神による治療」の長所として患者の「主体」性の重視を挙げていたことと一致している。しかし主体の取り扱いでこそ、フロイトとツヴァイクは相いれなかったと言える。

そしてこの食い違いは、フロイトが『女の生涯の二十四時間』を含む短編集『感情の混乱』

に寄せた作品批評とも関連付けられる。フロイトはツヴァイクの描写技法を批判する。

対象の持つあらゆる襞に接近する術を心得ており、感情のあらゆる響きを聴きとれるようにするこの描写技法は、読み手に与える印象を邪魔していると言っていいでしょう。その技法は読み手に推測や補完をさせる隙を与えません。表現されたものへの関心よりも、表現者への感嘆の方がほとんど先に来てしまうのです。(1926年9月4日, BW, 141) ⁴⁴

フロイトは、人の心理を説得力をもって隅々まで描き切る才能に称賛を送ると同時に、読み手に解釈の余地を残さないことへの不満を述べている。フロイトにとって「真実」を語るのは「患者」ではなくあくまで「医師」であり、「読者」だった。ツヴァイクの作品の全てを語る「枠内の語り手」、つまり「患者」は、フロイトの人間観から外れるものだった。⁴⁵

4. おわりに——主体性をめぐって

ここまで見てきたように、ツヴァイクの枠物語は「誰かが誰かに告白を行う」という点において、精神分析の通俗的な理解と一致している。他方で、ツヴァイクとフロイトの間に人間観をめぐる大きなすれ違いがあることもまた事実だった。もしも主体性の解体という精神分析の思想の一側面だけに注目し、そうした思想の投影にのみ文学的な価値を見出そうと試みるならば、おそらくこのすれ違いこそが、ツヴァイクの作品を読むに堪えない「三流文学」にするのだろう。そこではその作品を「器用な三文文士の書いた凡作」⁴⁶と一蹴するマグリスの見解が

⁴⁴ これは厳密には小説『感情の混乱』に寄せられた批判だが、ほぼツヴァイク作品全体に向けられたものと読める。また、フロイトの伝記を書いた精神分析家アーネスト・ジョーンズは、ツヴァイクについて、フロイトのこの批評とほとんど同じことを言っている。「彼は読者の想像に任せるところがほとんどなく、自分の物語のあらゆる箇所において読者がどう感じるべきかを教示した」(アーネスト・ジョーンズ『フロイトの生涯』(竹友安彦／藤井治彦 訳) 紀伊国屋書店 2007年、459頁)。

⁴⁵ なお 1926年フロイトからこの手紙を受け取ったツヴァイクは返信で「混乱した」、「昨日は筆をとることもままならなかった」(1926年9月8日, BW, 142)と漏らし、続けて再び勇気という言葉を持ち出して批判をかわそうとする。シュヴァムボルン(1999)は、この手紙のやりとり以降ツヴァイクは、フロイトの存命中には小説(Novelle)を発表しなかった、と指摘している。Vgl. Schwamborn, Ingrid: Aspekte des Spiels in Schachnovelle. In: Dies. (Hrsg.): *Die letzte Partie. Stefan Zweigs Leben und Werk in Brasilien (1932-1942)*. Bielefeld 1999, S. 265-296, hier S. 274. 確かに1930年代以降は伝記物での活躍が目立つものの、少なくとも1929年に小説『本のメンデル』が発表されているので、これは事実誤認と思われる。しかしこの指摘は別の事実気付かせてくれる。つまり語り手が自分の内面について延々と告白するタイプの物語は、枠の有無にかかわらず、この手紙以降長い間発表されないのである。1939年の長編小説『心の焦燥』まで、空白期間は10年を超える。この作品をツヴァイクはフロイトの存命中から書き始めていたが、それについて「あなたの世界への回帰」(1937年11月15日, BW, 174)と言っている。推測の域を出ないが、フロイトの手紙の指摘はツヴァイクの小説技法、特にその心理描写の根幹に関わるもので、そのためにしばらく書けなくなってしまったのかもしれない。

⁴⁶ クラウディオ・マグリス『オーストリア文学とハプスブルク神話』(鈴木隆雄／藤井忠／村山雅人 訳) 書肆風の薔薇 1990年、383頁。原著は1963年に発表されている。

絶対的な権威を持って、ツヴァイク作品は研究される余地を失ってしまうことだろう。

しかしツヴァイクとフロイトの間の齟齬をむしろ精神医学の歴史と照らし合わせ、文化史的な背景の中に位置付けてみれば、また別の側面が見えてくる。そしてそれとともに、ツヴァイクに対して違った評価が可能になると思われる。精神医学史家ショーターは、精神分析が大衆に流行した理由を次のように説明している。19世紀の器質論的精神医学や遺伝学と結びついた変質論は、精神の病は不治かつ不可逆のものというイメージとともに、人々の間に精神病院に入れられることへの恐怖を喚起した。⁴⁷ 精神病院は一方的に患者の主体性を奪うものと考えられていた。ショーターは精神医学者アルフレート・ホッヘの備忘録から、精神医学では患者は医者のことを敵だとみなしているという言葉を引き出している。⁴⁸ こうした中で精神分析は、あるいは精神分析的な治療は、人々に別様の病の在り方を提示し、さらに「情緒的にケアされているという暗示を作り出し、魂を探求する意図をもった医者と患者の間に交流」⁴⁹ を生み出すように思われた。精神分析はまさに「中産階級の感受性、特に気の長い内省の欲望に訴えるような治療」⁵⁰ だった。

ツヴァイクも、精神分析の流行の理由を、人々の自分の人格に対する関心の高まりやその尊重への希求の中に見て取っていた。以下は『精神による治療』の一節である。

個別の魂に目を向ける心理学のこの転換とともに、フロイトは知らず知らずのうちに時代の最も内奥にある意志を解き放っていたのだった。外的生活の単一化がますます進む我々の世紀におけるほど、人が真の自我、その人格に興味を示した時代はない。(HG, 377)

実際、精神医学の歴史を眺めてみれば、患者やその家族は主体性を求めて精神分析に注目したのである。その意味ではツヴァイクはフロイトよりも患者に幅広く主体性を与えることで、この時代の匂いを鋭く嗅ぎ取っていたとも言える。

ツヴァイクはこのような時代にベストセラー作家になった。本論から浮かび上がるのは、心理的ケアを求める時代の動向を機敏に察知し、人々の内省に寄り添う作家の姿だ。さらに現代の精神医学に目を移せば、薬物医療の席捲のあと、近年に至ってカウンセリングを始めとする精神療法が再び脚光を浴びている。そのような精神療法の始点の一つに精神分析がある。20世紀前半はそのまま現代に通じていて、この意味でツヴァイクの杵物語は現代につながっている。こうしたことは冒頭に述べた、近年ツヴァイクが注目を集め再び読まれているという事情と、

⁴⁷ ショーター、148 頁以下。

⁴⁸ ショーター、149 頁。

⁴⁹ ショーター、186 頁。

⁵⁰ 同上。

おそらく無縁ではないだろう。このように考えれば、19 世紀の遺物または「点景物」に過ぎないと揶揄されるツヴァイクの粹は、実のところ精神分析が人々に驚きと喜びとともに迎えられていた頃、つまり現代の始点の時代の産物とも言える。

Ein Erzähler, der zuhört

— Stefan Zweigs Rahmenerzählungen und Freuds Psychoanalyse —

KAGO Midori

Stefan Zweig schrieb viele Erzählungen mit einer Rahmenstruktur und einige davon haben ein ähnliches Schema: In der Rahmenerzählung berichtet der/die Ich-Erzähler/in der Binnenhandlung dem Rahmenerzähler, ebenfalls einem Ich-Erzähler, ein Erlebnis. In diesem Bericht, eben der Binnenerzählung, gesteht er/sie eine einst begangene Abweichung von den bürgerlichen Normen. Diesem Muster folgen vor allem „Der Amokläufer“, „Vierundzwanzig Stunden aus dem Leben einer Frau“, „Ungeduld des Herzens“ und die „Schachnovelle“.

Es ist behauptet worden, dass Zweigs Rahmenstrukturen bloße „Staffage“ seien (Stratmann, 2000) und keine große Bedeutung hätten. Doch in seinem autobiographischen Essay „Die Welt von Gestern“ schrieb Zweig, dass er beim Schreiben „alle[] überflüssigen Pausen und Nebengeräusche“ herausstreiche. Folglich hielt Zweig die Rahmenhandlung offenbar nicht für unnötig oder überflüssig. Wozu aber sollte sie dienen?

Die vorliegende Arbeit versucht, Zweigs Konzept des Rahmens mit der Psychoanalyse Sigmund Freuds, der mit Zweig Umgang hatte, in Verbindung zu bringen. Freuds Behandlungsmethode ist dadurch gekennzeichnet, dass der Psychoanalytiker seinen Patienten reden lässt. In der damaligen Zeit stand die Psychoanalyse im Brennpunkt des öffentlichen Interesses, nicht so sehr wegen ihrer theoretischen Grundlagen, sondern wegen dieser neuen Methode, die von der bisherigen somatischen Psychiatrie darin abwich, dass Arzt und Patient ein wechselseitiges Gespräch miteinander führten. Es gibt also eine gewisse Parallele zwischen den Beziehungen von Rahmen- und Binnenerzähler bei Zweig und dem Verhältnis des Psychoanalytikers zu seinem Patienten, die hier näher beleuchtet werden soll.

In seinem Essay „Die Heilung durch den Geist“ rühmt Zweig Freud als einen mutigen Menschen, der Tabus durchbricht und so die „Triebwelt“ entlarvt. Er sah den Psychoanalytiker als akademischen Rebellen, der mit seiner Methode der somatischen Psychiatrie entgegentrat und den Patienten nicht mehr als wissenschaftliches „Objekt“, sondern als menschliches „Subjekt“ behandelte. Zwar zeigt Zweigs Essay ein deutliches

Desinteresse an psychoanalytischen Theorien, hebt aber besonders hervor, dass Freud „de[n] unersetzbar einmalige[n] Wert jeder Menschenseele“ anerkenne. In einem Brief an Freud schrieb Zweig, dass er von ihm den Mut und nicht die Theorie lerne.

Um die Parallelität zwischen Zweigs Werk und Freuds Psychoanalyse zu überdenken, scheint es daher angemessener, den Tabus entlarvenden Mut zu betrachten, als sich auf die Theorie zu konzentrieren. Obwohl es wohl kaum nachweisbar sein dürfte, dass sich Zweig in seinen Werken direkt auf die Psychoanalyse bezog, erinnert die beschriebene Konstellation zwischen seinen Ich-Erzählerfiguren, in der die eine der anderen einen Tabubruch gesteht und so das Tabu selbst dekuviert, deutlich genug an die psychoanalytische Methode, wobei Zweigs zuhörende Rahmenerzähler zudem auch ihre Achtung vor dem sich ihnen öffnenden Individuum unter Beweis stellen, die er in seinem Essay über Freud so lobte.

Trotz der gemeinsamen Tendenz von Zweig und Freud, Gewicht auf die Entlarvung zu legen, tritt hinsichtlich dieser allerdings ein Unterschied in ihrem Denken hervor. Dies zeigt sich etwa an Zweigs Beschreibung des Falles von Breuer's Patientin Anna O. in „Die Heilung durch den Geist“. Er schreibt, dass die Patientin unter Hypnose alles eingestanden habe. In Wahrheit entwickelte Freud seine Methode erst nach seinem Bruch mit Breuer, worauf er auf eine Behandlung mittels Hypnose verzichtete. Freuds Theorie zufolge sprechen die Patienten das von ihnen Verdrängte niemals direkt aus, sondern der Analytiker muss es aus ihren fragmentarischen Bemerkungen rekonstruieren. In Zweigs Werken dagegen sind sich die Binnenerzähler/innen ihrer Tabubrüche voll bewusst und gestehen sie dem zuhörenden Rahmenerzähler offen ein. Aus einem Brief Freuds an Zweig wird deutlich, dass er mit dieser Darstellung psychischer Vorgänge unzufrieden war.

Doch war Zweigs Fehldeutung von Freuds Methode wohl ihrer Zeit verhaftet. Medizinhistorisch gesehen erlangte die Psychoanalyse damals gerade deswegen Popularität, weil sie unter dem Missverständnis rezipiert wurde, sie gebe im Gegensatz zur bisherigen Psychiatrie den Patienten dem Analytiker gegenüber einen größeren Spielraum als Subjekt. Diese Subjektivität war es, nach der die Patienten jener Tage verlangten. Wenn Zweig seinen „Patienten“ anders als Freud eine größere Rolle als Subjekt einräumte, folgte er damit also nur einer aktuellen zeitgenössischen Forderung. Von heute aus betrachtet, wo die Psychotherapie statt der bloßen Behandlung mit Medikamenten wieder größere Beachtung findet, kann man in Zweigs Werken einen Ausgangspunkt dieser Entwicklung sehen.